

三个島蓼子研究

枡本 良 福原 滉子
川合千鶴子 成瀬 晶子 共著

一、島嶼子研究

著 者 略 歴

- 枡 本 良 明治40年新潟県生 明日香同人
日本女子大学英文学部中退
東京都小金井市本町1—5—15
電 話 0423 (83) 6 6 5 4
- 川合千鶴子 大正9年東京生 明日香同人
都立第三高女卒 歌集「緑地帯」
東京都港区西麻布4—11—15
電 話 (03) 400—6 6 6 3
- 福原 晃子 大正6年東京生 明日香同人
日本女子大学英文学部中退
評論「万葉集女性の歌」共著
浦和市岸町3—9—21
電 話 (0488) 22—6 6 4 0
- 成瀬 晶子 大正11年静岡県生 明日香同人
日本女子大学国文学部卒
東京都小平市学園東町52—18
電話 (0423) 41—0 8 9 0

三ヶ島蓼子研究

©1976 Japan

昭和五十一年二月二十五日発行

定価 1,600円

著 者 枡 本 良
川 合 千鶴子
福 原 晃 子
成 瀬 晶 子
発行者 古 川 篤 夫

古 川 書 房

発 行 所 東京都大田区上池台4—29—3
電話(03)729-2556 振替東京5-45774

印刷・信陽堂／製本・東雲堂

落丁・乱丁はお取り替え致します

「三ヶ島葭子の研究」に寄せて

中川 一政

三ヶ島葭子の業績が、福原さんなどの共同研究によって世の中に残ることになったのは嬉しいことだ。

みなさんの努力も決して無駄にならないだけの業績が葭子にあると信ずる。

丁度五十年忌に当る日に、この一冊が墓前に捧げられることになった事は、葭子がどんなに喜んでいるかと思っても嬉しい。

私が見てきた葭子の一生は決して幸せだったとは思えない。しかしこれを代償として、葭子の業績は残ったのである。

いたましいが、そうである。

霞子は背水の陣を敷いて、おそいかかる悲しみにも苦しみにも耐え、またまれに訪れる束の間の喜びにも対していたのである。

知ることのよろこび

——『三ヶ島霞子研究』のこと——

久保田 正文

三年ほど前から、『明日香』に、枡本良・川合千鶴子・福原渥子・成瀬晶子ら四人のひとびとによる「三ヶ島霞子研究」が連載されはじめ、昭和五十年十月号の第三十回をもって完結した。そのたびごとに私などもかなり注意して愛読してきたつもりであるけれども、いま校正刷りでまとめて読みかえしてみると記憶に残らぬ部分があちこちにある。一冊にまとめるにあたって手をくわえた部分もずい処にあるらしいが、やはりこういう研究は書物としてまとめられることが特にのぞましい。そういう意味でもこんどの出版はありがたいことであり、うれしいことでもある。

三ヶ島霞子そのひとについて、私などは知らないことばかりであったと、いまさらのように思いかえされる。『吾木香』は、戦後に刊行された『現代短歌大系』本で、あらましは知ったつもりでいたが、中川一政の装画でかざられていることなどは知るべくもなかった。この研究での著者たちは、『三ヶ島霞子全歌集』未収録作品までさがし出すほどにもたんねんな努力をしているが、ひとところ彼女が小説も書き、詩もつくっていたということなども、たとえば『新潮・日本文学小辞典』での橋本徳壽の解説で知ることではできるだけ、それをしらべる具体的な手がかりは、本書によって得られるわけである。長谷川時雨から、女流作家の会への案内状をもらって、まず着てゆくきものについて思い惑う日記の一部分をひき出しているところなど、同性の著者たちの目くばりはいきいきとしている。

原阿佐緒とのかかわりによって、島木赤彦から『アララギ』を去らされる事件についてのディテールなども、この著者たちは細かく観ている。つまり、そこに新しい発見（事実の新しい掘り起し）があっただろうし、その発見が、女性たちの目に

よっておこなわれたことも、この書のひとつの特色である。赤彦は、阿佐緒には破門状を送ったが、葎子には△歌稿を返却することで暗に示した。▽ことに注目しながら、△アララギにとって大切な純は、その後も重鎮としてアララギに止まり、翌年大正十一年には、アララギ叢書として歌集「薨日」を出版しているのを見ると、いささか矛盾を感じるのである。▽と指摘している。大正十年ころの『アララギ』の体質と、鍛練道主義・島木赤彦の前近代性について、ひかえめな批判を放っている部分とみられるであろう。

三ヶ島葎子にとって、△歌が生活であり、命であった。▽というところに観点を据えた著者たちは、△葎子の歌風の遍歴を思うと、人生の真の苦しみをまだ知らない夢多き娘時代に浪漫的な与謝野晶子に魅かれ、現実生活の苦悩にひしがれた日に、歌の究極は「人生の寂寥所」であると言い、鍛練を唱えた島木赤彦に鍛えられ、終りに共に弱い人間として生きた古泉千樫に、主情的な詠風と、自由な表現をゆるして導かれたことを思うと、まことにその人生の中で、その折々に最も適切な

師にふれあうことの出来た事を幸せとしなくてはならないのであろう。▽と、概括している。みごとに成果である。

ふたたびおもえば、三ヶ島葭子について、私などはこの書ではじめて教えられることばかりであった。少年時代に、短歌の雑誌などよみ散らしはじめたころから、多少の作品などは知っていたつもりであったが、『青鞥』の仲間になってからのそこでこのしごとのことや、その人がら、特に病弱で生涯くるしんだことや、それにもかかわらず、生涯ついに宗教的なものに縋ることをしなかったという事実や、結婚生活にまつわる複雑さなどについて、この書ではじめて知ることができた。それほども知識の乏しかった私が、いま、この著者たちが永年かけてしらべた、この書について、行きとどかぬ感想をしるすことになった、ゆえんについて、終りにひとことつけくわえておきたい。

大森の馬込に、私の住みついたのはもう二十余年前である。この馬込に、私よりは遙か以前、△昭和初年のインテリ作家▽時代、あるいは△空想部落▽時代ころか

ら住みついている矢部堯一さんがいる。矢部堯一さんは、もちろん私にとっては大先輩で、ドイツ文学者としても、小説家としても古い人びとに知られている。エルンスト・トルラーについては、とくにすぐれた研究者である。住いが近かったこともあって、矢部堯一さんとおつきあいをいただくようになって、これももう二十余年になる。ドイツ文学についても、昭和初年来の△馬込文士村▽風俗についてもくさぐさのことをおしえられ、たのしませていただいた。

しぜんに、矢部堯一さんと、私の郷里、長野県諏訪出身の今井邦子さんとのつながりのことも知らされた。今井邦子さんの長女長谷川節子さんが、そこにづらなってくる。長谷川さんの仲だちで、川合千鶴子さんにもお会いすることになった。

今年の、秋のはじめころ、矢部さんが、長谷川さんと川合さん同道で、私の家を訪ねてくださった。そのときはなしが、『三ヶ島葭子研究』について、感想を書けということであった。私は固辞したけれども、大先輩矢部さんの、やんわりとして、しかし抜けどころのないカラメテで、出口をふさがれた。そうはいいながら、

先輩のことばにはすなおにしたがうというのが私の方針でもある。まだ知らないことを、もっぱら書物によって知ってゆくことも、いつの間にか身についた私の生きかたである。知らないものにこそ、知る権利があり、知らないものがはじめて知ったことのおどろきと、よろこびとを書きつけておくことも、まったく無意味ではないだろうと思いきめて、矢部堯一さんのすすめにしたがうことにしたわけである。この書物の前途に、さいわい多いことをいのる。

昭和五十年霜月下旬。

目次

「三ヶ島霞子の研究」に寄せて	中川 一政……………	一
知ることのよろこび	久保田正文……………	三
生い立ち……………		一五
投稿時代……………		二〇
文学への目覚め……………		二〇
女子文壇―処女……………		二六
スバル―我等……………		三〇
青鞥―平塚雷鳥……………		三四
与謝野晶子……………		四〇
結婚……………		四四
杉本寛一と倉片寛一……………		四四

小宮村を去る……………	四
結婚……………	五
小説「途上」……………	六
みなみ誕生……………	三
みなみを手離す……………	七
交　友……………	七
原　阿佐緒（二）……………	七
「アララギ」時代……………	八
アララギ入会……………	八
代表作「なやみ」……………	四
他誌　寄稿……………	三
詩　歌……………	五
嬰　児……………	七
玄　土……………	八
早稲田文学……………	三

目 次

倉片 大阪に赴任	三五
歌集「吾木香」	三九
原 阿 佐 緒 (二二)	四四
古 泉 千 樫	五三
日 光	五九
倉片の愛人・父の死	六七
関東大震災	六七
谷 町 の 家	七〇
病 い	七〇
青 垣	七四
死 の 訪 れ	七〇
死後のこと	七九
あとがき	五三

三ヶ島葭子研究

